

## 恕軒・円朝・鷗外・漱石

### — 明治期における漢学と落語との接点 —

池澤 一郎

—  
 信夫恕軒 (1835~1910) といっても、今ではその名を知る人も少ない。幕末考証学者の雄として名高い松崎慊堂 (1771~1844) の高弟であった海保漁村 (1798~1866) について漢学を学び、幕末から明治期にかけて、成嶋柳北 (1837~1884)・菊池三溪 (1819~1891)・依田学海 (1833~1909) 等と交流しつつ、活躍した漢学者であると記しても、ここに列挙した人名がすべて世人の耳目に縁遠いので、あまり説明したことにはなるまい。

森鷗外 (1862~1922) との関連を想起すれば、これらの人士とわれわれとの距離が少しく接近するかの如くである。鷗外が少年期に、漢詩文の添削を乞うたのが依田学海であり、その面影は「百物語」や「キタセクスアリス」の文淵先生として近代文学の読者の耳目にも親しい。成嶋柳北主催の雑誌『花月新誌』は鷗外が愛読したもの（「カズイスチカ」、「キタセクスアリス」）で、その雑誌に頻繁に記事を寄せた人として、菊池三溪の名が、その著『晴雪楼詩鈔』、『本朝虞初新誌』とともに「キタセクスアリス」に記されていた。

柳北のことでいえば、『花月新誌』掲載の「航西日乗」は鷗外の「航西日記」のみならず、その高弟永井荷風の『断腸亭日乗』の文体の模範とされたものであり、幕臣としての反骨精神を維新の後に堅持して、新聞紙条例や讒謗律批判の記事を『朝野新聞』に、自由民権運動を後押しする文章を『読売新聞』に掲載した柳北が、高座での官憲擲諭を咎められて拘引されたこともある（明治七年十二月八日）落語家三遊亭円朝を高く評価していたことはあまり知られていない。

菊池三溪の「天女使」（『本朝虞初新誌』巻上所収）が『花月新誌』に掲載された際の柳北の評語は「行文奇幻、人をして目瞠り心悸かしむ。落語家円朝毎に這樣的説話を為す。聴者、皆嘆賞す。然れども余を以て之を觀れば、朝の舌も亦翁の筆に及ばざること遠し」というもので、円朝が一籌を輸するとしてはいるが、もと将軍家侍講であった三溪の格調高い漢文と円朝の落語とを同じ組上で評している態度が、柳北の囚われない精神のありようと円朝への高い評価とを物語る。菊池三溪は『本朝虞初新誌』（1884）所収二十四篇の漢文の中、三分の一に当たる八篇の趣向を講談から採

っていた。『西京伝新記』（1875）という別の著述では、京都新京極の講釈場内外の景況を活写し、あまつさえ、講談『赤穂義士銘々伝』の中「赤垣源蔵徳利の別れ」一篇を流麗な漢文を以て克明に紙上再現している<sup>(1)</sup>。

「天女使」という文章は女装した盗賊の話で、当時流行の白浪ものの講談の影響をもろにひっかぶった内容を有している。その点で、三溪には、柳北が、円朝と並べて評する資格は充分なのである。われわれは漢詩文と落語講談とを雅と俗とで峻別することなどに拘泥しては、漢学者の方から「俗」の方向にぐっと歩み寄って来ている、この時期の文藝の質を見誤りかねない。



報告者の発表風景

### 二

鷗外との因縁で、学海、三溪、柳北の名前を手元に引き寄せたが、信夫恕軒も鷗外との因縁なしとせぬ。

宗像和重氏が「投書家時代の森鷗外（下）」<sup>(2)</sup>で紹介された陸軍に出仕する以前の若き鷗外の記事の中に「業平文治」と題する一篇があつて、ここには二十歳の鷗外と三遊亭円朝と信夫恕軒との距離が端的に示されている。煩を厭わずに全文を私に校訂して引用する所以である。

善なる者は以て人の善心を感じず可く、悪なる者は以て人の逸志を懲創す可し、とは朱子が毛詩を説きたる辞にして、勸善懲惡の四字は千古稗官者流の口癖とはなりにけり。然れども稗官小説の此の四字に恥ぢざる者はいと少なかる可し。夫の話し

し家と唱ふる者の演ずる所も亦然り。多くは之を諷するの義を忘れて之を勧むるに幾きものなり。独り此の弊なきものは、其れ唯だ三遊亭円朝か。円朝の嘉元善行、世の廉恥なき話し家等に立ち超えたる事多きは、信夫怨軒先生の円朝伝を見て知るべし。宜なる哉、其の説く所、忠義の談、節烈の話、人をして掌を拍ちて快と呼ばしむるや。予、頃ろ閑を偷みて、其の一齣の談を訊ね聞きしに、業平文治が義侠狷介、隣家の悍婦の姑を虐するを見るに忍びず、肋を摧きて殺害せしより、其の母、憤りて絶粒し、死を求むるを聞き知りて、文治が哀きの一段にて満場すべて肅然と感激嗟嘆したるが中に、予も恍乎として聞き居たりしが、事果てて後、熟々思へば、所謂業平文治の伝記は、もと淄川の蒲留仙が聊齋志異に記したる崔猛が伝よりの翻案に外ならざる可し。彼の崔猛の一伝は絶代の妙文にして、虞初統志にも収められたり。是に由つて之を觀れば、三遊亭円朝は怨軒先生の薫陶にて彼の土の雑書を翻閱し換骨して話種とすなれば、其の時輩に殊なるも由て来るところあり。蒲生髮亭先生の曰く、円朝の笑話を聴けば、史遷の諸伝を読むが如しと。その善心を感じ、逸志を懲創するに至て誰かまた箇の不の字をいはんや。記して以て読売社に投ず。

右の記事で注目すべきは、文体の老成ぶりもさることながら、筆者鷗外が頻りに寄席に通っていた消息が看取される点であろう。円朝の高座を評するのに、他の噺家を引き合いに出す点にも、そのことは窺われるが、「少壮時代には殆毎夕寄席に往き」（鈴木藤吉郎）という表白は決して誇張の言ではなかったのである。「キタセクスアリス」、「雁」、「里芋の芽と不動の眼」といった諸作品の随所に作者の寄席趣味に年季が入っていたことが推察されるが、遺族の証言もそのことを裏付ける（小金井喜美子『鷗外の思ひ出』「寄席」、『森鷗外の系族』「次ぎの兄」）。

さらに注目に値するのは、「円朝伝」に言及して信夫怨軒の漢文に親しんでいたことを表白している点である。怨軒の「三遊亭円朝伝」は柳北主筆の『朝野新聞』、明治九年十月二十二日に今文体（漢文訓読体）で発表され、後に明治十年十二月に刊行された『怨軒文鈔』初篇に漢文体で収められたものであった。鷗外は右の投書記事をなす以前にこのいずれかに接していたであろう。怨軒の名前は鷗外の文章の中に、柳北・学海・三溪ほどは登場せぬが、それでも小倉時代の「心頭語」の「厭倦の預防」（1900）に「午食後一二時間とはその懶惰の時なるべし。信夫怨軒の解釈は姑く置きて、

昼寝ぬるものは昼寝ぬべき時なるべし」という一節があつて、『怨軒文鈔』二編巻之下「宰予昼寝説」をふまえていることは明らかだから、鷗外が柳北等と並行してこの人の漢文をも嗜んでいたことが察せられる。

もうひとつわれわれの注意を喚起するのは、円朝の「業平文治漂流奇談」のひとくたりの典拠を特定して、『聊齋誌異』または『虞初統志』所収の崔猛伝としてあることである。『聊齋誌異』、『虞初新志』、『閩微草堂筆記』、『子不語』などの清朝筆記小説が、幕末から明治期にかけて漢学者の間で推重され、彼等の綴る紀事文の典範となっていたことはかつて説いた<sup>3)</sup>。この中、『虞初新志』は、「商舶載来書目」（大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』）には宝暦十二年（1762）に舶来の記録が見えるが、記録にはなくとも享保頃には受用されていたという指摘もある<sup>4)</sup>。しかし、より広範に受け容れられたのは、文政六年（1823）に和刻本が上梓されて以後のことであった。この書はもちろん唐土においても好評を博し、『廣虞初新志』、『虞初續志』、『虞初餘志』などの類似書が陸續と発刊された。鷗外の手はこれらの唐本にまで及んでいたわけであり、「雁」「キタセクスアリス」などに窺われる主人公の『虞初新志』への傾倒ぶりは小説的虚構を割り引かず率直な作者の自己投影として読むべきことが知れるのである。

右に瞥見した、清朝筆記小説への耽溺、明治前期漢学者の文業への傾倒、尋常ならざる寄席趣味、の三点は、鷗外が終生堅持した教養の質の一端を窺わせるものであるが、それぞれが密接な関連を有していることにあらためて注意を喚起したい。柳北・三溪・学海・怨軒等、明治前期漢学者の紀事文は、概して清朝筆記小説の文体趣向に習ったものであり、清朝筆記小説の中に、「馬伶伝」（『虞初新志』巻三）「柳敬亭伝」（同巻二）のような俳優や講釈師の伝があれば、それを有力な後ろ盾として、三溪の「市川白猿伝」（『本朝虞初新誌』巻中）、「尾上多見蔵伝」（同巻下）、学海の「俳優団十」（『譚海』巻之三）、怨軒の「三遊亭円朝伝」（『怨軒文鈔』）、「俳優田之助伝」（『怨軒遺稿』）は、当時なお残存していた藝人を身分制社会の埒外に置く偏見を打破して、書かれるべき趨勢にあった。そしてこれらの漢文が書かれるに際しては、これらの漢学者の「殆毎夕寄席へ往き、殆毎月劇場に入つた」という日常が、豊富な文章の題材をおのずと備えさせていたことに気づかなくてはならない。

明治前期漢学者の寄席趣味は、単に彼等が封建制身分意識の拘束から脱して、劇場や寄席へ頻りに通つたという経験をも、漢詩文の題材となすに至つていたと

いうことのみを意味するのではない。彼等は寄席や劇場の藝人と、既にかつての身分差に囚われずに自在に交際するようになっていたことを意味するのである。『学海日録』には、学海と九代目市川団十郎、二代目松林伯田との交流の様態がつづさに看取しうる文章が散見されるが、ここでは三遊亭円朝がらみの記事を二、三見ておくこととしたい。

午後、川田甕江氏の招に応じて牛込に至る。此日、落話の名家三遊亭円朝を召して、一席の快話を催さる。孝子鬻身の話、孝女継母つかによく事ふるの話あり。形容の妙、言語の態、神に入るといふべし。小永井小舟・四尾徳峯・三島中洲・広瀬青村の四君来り会す。信夫怨軒は円朝と親しければ、これを紹介す。(明治十一年五月四日)

右の記事からは、川田甕江、三島中洲といったやがて天皇の侍講たるべき漢学者と学海、怨軒等「軟派」の漢学者とが分け隔てなく付き合っていたことが知れるのが有難い。その席に円朝が招かれていること、その話藝を学海が絶賛していること他に、円朝と歴々たる漢学者たちとを仲介する役割を信夫怨軒が自ら買って出ている一事には特に着目したい。

柏屋に至り藤井善言と小酌せり。信夫怨軒が三遊亭円朝をともしなひ来れるにあひき。円朝老母に孝あつかりしが、いぬる日うせにきと。年七十三なりとぞ。(明治十二年七月九日)

先の記事に推察された他の漢学者に比して一段と深い怨軒と円朝との交遊の様が、右の一緒に飲み歩くと二人の姿に集約されている。これに「三遊亭円朝伝」の、自分のために「史伝」の講義をして欲しいと怨軒に依頼するくだりや、永井啓夫氏が紹介された愛弟子橘家円喬の教育を怨軒に依頼したことなど<sup>6)</sup>を思い併せれば、「怪談牡丹燈籠」のネタを怨軒が提供したという説や「業平文治漂流奇談」の一節の原拠を円朝に教えたのも怨軒であったという鷗外の指摘も極めて信憑性の高いものとなる。

### 三

円朝の作、「名人長二」は、明治二十五年(1892)円朝が湯河原に湯治中に取り掛かり、明治二十七年四月二十八日から六月十五日にかけて『中央新聞』に発表されたもので、速記録によるものではなく、円朝自身の執筆に拠るものであった(以下引用文は『明治の文学第3巻 三遊亭円朝』、筑摩書房、2001に拠る)。円朝は明治二十四年六月以降、席亭の横暴を是正せんと試みて失敗したことを機に、東京の寄席に出なくなっていたので、「名人長二」は、高座にかけられる機会の

ないまま、十月二十四日初日の新富座で芝居として上演された。作者円朝はつとに明治十一年の段階で依田学海から「名家」と呼ばれていたことを先に見たが、この頃「名人」との評は押しも押されもしないものであった。加えて梨園の一方の雄であった五代目菊五郎は、主人公長二が体現する江戸の職人気質を演じるのうってつけのわざおぎであったので、以後狂言「指物師名人長次」は五代目の当たり狂言となったのである。この作のプロットは有島武夫人幸子に円朝が教えられたフランスの小説家モーパッサン(1850-93)の「親殺し」に拠るものとされるが、物語の展開に漢学者が重要な役割を果たしている。その漢学者とは、ひとりには実在した林大学頭述斎(1768-1841)であり、もうひとりを円朝は「或方」と匿名にしている。先に見た「軟派」の漢学者のいずれかであろうが、もちろん柳北は既に没しており、三溪も上方に去っていたから、学海か怨軒、あるいはまた親交が伝えられた大槻如電などである可能性もあるが、やはり円朝にもっとも近い漢学者として、最有力候補は怨軒でなくてはならない。

富商坂倉屋助七は、見てくれも美しく、非常時にも簡単には壊れない仏壇の製作を長二に依頼する。七月を経て漸く出来上がった仏壇の手間賃として、長二は百両を請求する。材料の桑板も全て自分が提供していたので、これを法外とした坂倉屋は憤って、約束通り簡単に壊れぬかどうか、自分の手で確かめるべく才槌で「何処といふ嫌ひもなく続けざまに仏壇を打」つ。坂倉屋が息を切らすまで打ち続けても、仏壇の表面の板には傷が付いても細工が緩んでがたが来ることは微塵もなかった。傷の付いたものは商品として渡せないし、自分の腕を一度でも疑われたのは職人としての恥辱だからといって、仏壇を引き取って帰ろうとする長二に坂倉屋は、傷の付いた仏壇を家宝として子々孫々に伝えるからと何度も詫び、手間料百両の他に、さらに百両をとらせようとするが、長二は頑として受け取らなかった。この傷の付いた仏壇の因縁由来を、出入り先の林述斎に漢文で書いてもらったと円朝はしている。またこの間に、円朝は坂倉屋の一人娘十八歳の島を登場させ、頑固一徹にして正直無二の長二の気象に好意を寄せさせて、一の彩を添えている。

二度目の漢学者登場は既に結末近くになって、南町奉行筒井和泉守の白洲での吟味の場面においてである。吟味の内容は、長二の継父幸兵衛と実母柳との殺害容疑についてであった。実際は正当防衛に類するものであったが、現在の親を二人まで殺して、それを自ら白状に及んでいる長二の罪科は死刑を免れぬ所であった。

関係者の証言から、長二の清廉潔白ぶりを知った奉

行は何とかして、長二を助けようと思案する。取調べが進んで、長二の継父幸兵衛は、実母柳と姦通し、人をして実父半右衛門を殺害せしめていたことが判明し、継父殺しについては、実父の仇討ちということとなった。しかし、柳は実際に腹を痛めて長二を生んだ母親であるから、親殺しの罪名はやはり免れない。思案にあまった奉行は將軍家にまで長二の罪科裁許を嘆願し、將軍家斉は、林大学頭述齋に類似の判例が中国にないかと相談する。

述齋は『礼記』檀弓「子上之母死す。而れども喪せず」以下の、子思の息子の子上が、以前に父から離縁されていた実母が亡くなった際に、喪に服さぬのを、子思の門人が難詰する場面を引いてこう説明した。子思が離縁した女性は、既に子思の妻ではなく、同時に子上の母でもないで、喪に服さずとも構わないのである。長二の母柳は、幸兵衛と姦通し、それと謀って夫半右衛門を殺した大悪人であるから、半右衛門が生きていたら当然離縁されていた存在である。さすれば柳は既に半右衛門の妻ではなく、離縁された妻は、『礼記』の内容に照らせば、たとい何の罪科が無くとも、もう長二の母ではなく、他人である。姦夫と共謀して、実の父を殺した他人を殺しても仇討ちとは見なされても、親殺しにはならない。こうした理屈立てで、長二は死刑を免れるばかりか、奉行から褒美をも受ける。円朝は、経書『礼記』の注疏本まで噛み砕いて右のような内容を設えたのである。述齋は実在の人物ではあるが、家斉の相談に与って、『礼記』檀弓の内容を進講したというのはもとより円朝の虚構であろう。その虚構をなすに当たって、経書の知識を提供したのが「或方」、恐らくは信夫怨軒であったのである。円朝は「四書の素読もいたした事のない無学文盲の私には、所詮お解りになるやうには申上げられませんが」と謙遜しているが、どうしてどうして、一読して理解するように説明を加える円朝にもある程度の漢籍の素養がなければ、怨軒が提供した知識をここまで明晰に利用することはかなわなかったであろう。

この後、長二は実父の跡目を相続し、職人から大身代の亀甲屋の主人となる。そのことによって、以前から長二を憎からず思っていた坂倉屋の一人娘島、今は南町奉行の腰元となっていた島路を嫁に迎えることとなるのである。実はここにひとつの曲があった。これより先、島路が吟味中の長二について奉行から下問された折に、口を極めてそのひととなりを称賛した。裁判の参考にすると公言出来ぬ奉行は腰元たちが誤って勘ぐるままに、長二と島路とを縁付けさせようとしているのだと言ひ紛らす。島路はそれを「私家は町人なが

らも系図正しき家筋でございますれば、身分違ひの職人の家へ嫁入り致しましては、第一先祖へ濟みませず、且世間で私の不身持から余儀なく縁組を致したのであらうなぞと、風聞をいたされますのが心苦しうございませば、何卒此の儀は此の場ぎりの御沙汰に願ひ申し上げます」と峻拒するのであった。ここには近世後期、商品経済の勃興が、幕藩封建体制を土台から揺るがし、士農工商という身分制社会が実際には「士商工農」といった意識で庶民に捉えられていたことを円朝が洞察していたことが窺える。しかしながら、この島をして一旦は長二への嫁入りを峻拒せしめた封建社会の鞏固な身分意識は、長二が亀甲屋という、坂倉屋の身代と見合う富商の主人となるや、一気に雲散霧消し、真情の発露するままに、長二に嫁入りすることを可能とした。

円朝の趣向立ては、彼の嚆を改めて「近代」文学として見直すことをわれわれに迫る。モーパッサンという泰西の小説家の作品の翻案の舞台を近世後期の江戸とした段階で、円朝は、自らも半生を送った徳川末期の空気を蘇らせるべく、商人に至るまで骨がらみになった身分意識というものを、それも実際に即して「士農工商」を「士商工農」に転倒した形で浮き彫りにしたことが第一点である。次にその身分意識を封建的節度として登場人物に維持させながらも、実際には身分差を打ち超えて、「系図正しき家筋」の富商と両親殺しの嫌疑のかかった「身分違ひの職人」とを結婚させる理屈立てを、同時代に流行した新知識などには求めずに、「近代」主義者からは、えてして封建体制擁護の学問のテキストとして敵視されがちな、四書五経の中に求め、それを銜学趣味とは隔絶した、極めて分かりやすい形で衆庶に提示し、「少しは無理らしきところもあれど」と饗庭篁村が評した（『竹の屋劇評集』）如く、やや強引な点はあるが大団円にまで持って行っていることが第二点である。福沢諭吉の反儒教主義であるとか、井上哲次郎の国民道徳論などといったその時々流行、時勢に流されたスタイルに拠るのではなく、自身の眼で儒教の本質を洞察して趣向を立てようとする円朝の姿勢に関しては、たといそれが信夫怨軒という知恵袋より提供された知識であったにせよ、かかる頭の働かせかたを旧弊の一語で葬り去って突っ走ってきた「近代」を反省するために、改めて徹底的な検討と再評価を要するものであろう。

#### 四

円朝のモーパッサンは耳学問であったのだが、鷗外が後半生にその名に言及する場合は、小倉時代にレベ

ルアップしたフランス語の力によって原文について得た知識であったはずである。しかし、その知識をバタ臭いままに放置せずに、寄席の中に吹いていた江戸の香気に包んで、反芻して愉しめたのが、鷗外の強みであった。しかし、円朝のみならず、柳北・三溪・学海・怨軒と同質の寄席趣味を鷗外が備えていたが故に可能であった、そうした鷗外の側面について、従来の研究者はほとんど触れる所がない。「藤簾絵」(1911)という作品には明らかにテオフル・ゴーチエの『モーパン嬢』と分かる作品の梗概と、作品名未詳ではあるが、モーパッサンの作だと鷗外がおぼつかげに語る作品の梗概とが記されている。後者は「田舎に住んでゐる、極真面目な家の細君が、一生に一度是非浮気がして見たいと思ひ立つて、わざわざ汽車に乗つて巴里へ出る話」とされるもので、その細君はやがて、巴里の有名な画家の家に押しかけて関係を迫まるのである。一つの蒲団に寝たがる田舎の細君に辟易した画家は「御覧の通り一人もので、寝台も一つしかありません。」というが、細君は「どう致しまして。なるたけお邪魔にならないやうに、小さくなつて臥せります。」と引き下らない。続けて鷗外は「女はさすがに恥かしいので、顔を隠してちちこまる。先生は不精不精に樺太の半分まで我慢して、境界線を踏まない限り、なるたけ楽に仰向けになつて、手足を踏み伸ばして、忽ち高駟で寐てしまう」と記している。この「樺太」という語に留意されたい。勿論、日露戦争後の極めて時事的な語彙なのであるが、この語は二年前の明治四十二年に発表し、発禁処分をくらった「キタセクスアリス」の次の一節にも見えるのである。

十一歳の金井湛は、出入りの家従仲間の針医であった銀林という男に連れられて、初めて京橋の寄席の昼席を見る。高座で噺家がしゃべっていた噺は「徳三郎」といふ息子が象棋をさしに出ていた。夜が更けて帰つて、閉出を食つた。近所の娘が一人やはり同じやうに閉出を食つてゐる。娘は息子に話し掛ける。息子がおちの内へ往つて留めて貰ふより外はないと云ふと、娘が一しよに連れて行つてくれると頼む。息子は聴かずにずんずん行くが、娘は附いて来る。おちは通物とおりのものである。通物とは道義心の lax なる人物といふことと見える。息子が情人を連れて来たものと速断する。息子が弁解するのを、恥かしいので言を左右に托してゐるのだと思ふ。息子に恋慕してゐる娘は、物怪の幸と思つてゐる。そこで二人はおちに二階へ追い上げられる。夜具は一人前しか無い。解いた帯を、縦に敷布団の真中に置いて、跡から書くので譬喩が anachronism になるが、樺太を両分したやうにして、二人は寝る。さて

一寐入して眼が醒めて云々といふのである」。言わずと知れた「宮戸川」の梗概である。鷗外の文章は簡にして要を得ている。後続の文で、廓晰「明鳥」に言及して、艶種の人気演目二つに初めての寄席で接したとしているのは「キタセクスアリス」ならではの虚構としてよいであろう。右の梗概で「解いた帯」でひとつ布団に境界線を引いて、「樺太を両分したやうにして」という一節が、「藤簾絵」冒頭のモーパッサン作品の梗概とぴったり照応する。鷗外の十一歳は、明治五年(1872)であろう。日露戦争後の流行語「樺太」を明治五年の回想に嵌め込んだのだから「anachronism」なのである。梗概末尾の「云々」は梗概をここで断ち切るために用いた語であるばかりではなく、実演される場合もここでサゲとなるのである。何となればすなわち「云々」で省略されている内容は、若い「息子」と「娘」との濡れ事なのであった。濡れ事を露骨に描写せずに、省略に従うのが、落語の美学であり、「云々」はそれを踏襲したものである。この省略法は「ここから先は本が破れていて・・・」と話家が講釈師のように高座で本を読んでいたこととしてサゲるやり方が、現在でも古今亭一門の落語家に継承されているが、五代目古今亭志ん生(1890~1973)が演じていた型である。この型が志ん生が師匠であったと広言する橋家円喬という、円朝のたつての頼みで信夫怨軒が教育を施したという伝説の名人によつても演じられていれば、時代的に鷗外はその高座に接しうる機会があった。鷗外がこの型を知っていたとすれば、「藤簾絵」と並行して執筆していた「青年」(1911)の次の一節は、「宮戸川」の趣向を嵌め込んだものと見なしてよいこととなる。

突然なんの著明な動機もなく、なんの過渡もなく、(この下日記の紙一枚引き裂きあり。)

その時己は奥さんの目の中の微笑が、凱歌を奏するやうな笑に変じてゐるのを見た。

「青年」では、右の引き裂かれた日記の紙の一枚に主人公小泉純一と坂井未亡人との情事が記されていたと察せられるのである。

「青年」は鷗外が、漱石の「三四郎」(1908)に刺激されて創作したものであることが知られている。そうと知れば、「三四郎」が上京途上、列車で乗り合わせた女性と名古屋でゆくりなくも同宿をせざるをえなくなり、かつ夫婦ものと勘違いした宿の女中がひとつしか用意しなかった布団にふたりで夜を明かさなくてはならなくなった「一の四」のくだりが想起されなくてはならない。

「失礼ですが、私は疝性で他人の布団に寝るのが嫌だから・・・少し蚤除の工夫を遣るから御免

なさい」

三四郎はこんな事を云つて、あらかじめ、敷いてある敷布の余つてゐる端を女の寐てゐる方へ向けてぐるぐる捲き出した。さうして布団の真中に白い長い仕切りを拵らへた。女は向へ寝返りを打った。三四郎は西洋手拭を広げて、これを自分の領分に二枚続きに長く敷いて、其上に細長く寝た。其晩は三四郎の手も足も此幅の狭い西洋手拭の外には一寸も出なかつた。女は一言も口を利かなかつた。女も壁を向いた儘凝として動かかなかつた。

漱石は帯の代わりに敷布や西洋手拭を用いさせているが、ほぼ「宮戸川」の趣向をそのまま使っているのである。決定的に違うのは、「樺太」の境界線で仕切られた男女がそのまま結ばれることなく、朝を迎える点である。漱石は省筆によってでも、男女の情事を書くことをせず、ここでは三四郎の純潔を守り、女から「あなたは余程度胸のない方ですね」と嘲笑されることとするのである。わたしはこれを漱石自身の純情の投影と見ている。鷗外は強烈に意識していた漱石の、「三四郎」の「宮戸川」の趣向を借りた右の一節をふまえて、「キセクスアリス」と「青年」とに二度に亘って「宮戸川」を点じて、じつと漱石の反応を窺っているといった塩梅なのである。ここには松山出身の正岡子規が漱石に対抗意識を燃やして友人に借金してまで寄席に通いつめたのと似たものが感得されるのである。因みにここで、漱石の一事を不意に挿入したのは、お茶の水大学教授菅聡子氏のお勧めによる。

## 五

鷗外と漱石との教養が地続きであったというのは、何も落語に限ったことではない。先に見た、柳北・三溪・学海・怨軒等が競って読み、自らの寄席趣味を投影する漢文を綴るに際しての抛り所としていた清朝筆記小説もまた鷗外のみならず、漱石の読書目録の中に数え上げられるものであった。次の一句はそのことを証し立てる。明治二十九年の句稿に見ゆ。

魏叔子大鉄椎伝一句

星飛ぶや枯野に動く椎の影

これはいうまでもなく、『虞初新志』巻一「大鉄椎伝」の一節「時に鷄鳴き月落ち、星光荒野を照らす。百歩にして人を見る（原漢文）」に抛る句である。そしてこの「大鉄椎伝」こそは、鷗外が『雁』参で「岡田は虞初新誌が好きで中にも大鉄椎伝は全文を誦すること出来る程であつた」としたものであったのである。『雁』にはヒロイン珠と面影の重なる「小青伝」もまた『虞初新誌』の中で岡田＝鷗外の愛誦した漢文であ

ると記されていて、もつぱらそれが注目されているが、近世からの漢文学史の流れの中ではむしろ「大鉄椎伝」が着目されるべきかも知れない。<sup>6)</sup> 漱石も句作りにその一節をふまえる位だから、「大鉄椎伝」をば暗誦するほどに愛読していたことは間違いないし、この句を含む稿を読ませるべき相手であった子規もまた『虞初新志』を座右の書としていたことが予想されるのである。

漢文学と落語という、前者はいまだに古典文学研究者の中にすら「化石」などと称して疎んじるものが跡を絶たないほど、その難解さゆえに放置されて来たジャンルだし、後者は「自然主義文学」を中核とする、日本「近代」文学史研究が深刻で真面目な私生活の告白を重んずる余り、滑稽諧謔といった近世文学には豊富に存していた要素を軽んじてきたことと、柳田国男が繰り返して批判した、活字になったものしか研究対象にしないという狭量な態度が支配的であったこととの故に研究が立ち遅れている分野なのであった。得てして「近代」文学史では無視されがちであったこのふたつの視座から、鷗外と漱石の作品を見直すと、右に瞥見したような、意外な側面が次々に浮かびあがって来るであろう。

漢文学にしる、儒学に宿命的に付随する革命思想が、伊藤博文等明治政府の権力者に警戒された面や、西洋思想を受け容れる素地を作った合理的思考を鍛え上げていた側面はもっと見直されるべきである。また、講釈師や落語家は明治初期には大経宣布運動に当たって、国家権力によって教導職に絡め取られ、その結果備えるに至った社会的影響力が、自由民権運動の勃興に際しては、大いに物を言って、運動家や政治家の演説を指導したり、自らも時に拘引を辞さずに民権思想を鼓吹したり、権力批判をほしきままにしたという歴史の皮肉に想像力を馳せる必要もある。いずれも現在の漢学や寄席藝能の衰退した状況しか知らないものからは想像を絶することなのであるが、歴史を学ぶに当たっても現状追認主義を事とするような停滞した状態からは脱しなくてはならない。つまりは文学とか、思想とか、政治とか、藝能とかジャンルの中に閉じこもってその中だけを求心的に掘り下げるだけではなく、ジャンルに囚われずに人間の営みを自在に見つめて行くことの必要性を、柳北・三溪・学海・怨軒・鷗外・漱石の文業は教え続けてくれているのである。サブカルチャーの淵源を戦後のアメリカにのみ求める囚われた態度を捨てて、漢学者の寄席趣味などをサブカルチャーと同質の刺激をわれわれに与えてくれるものとして見直せる柔軟性が必要なのである。

注

- (1) 『新日本古典文学大系 明治編 漢文小説集』(岩波書店、2005) 解説『『本朝虞初新誌』と講談』。
- (2) 宗像和重氏「投書家時代の森鷗外(下)」(『文学』岩波書店、1986・11、後に『投書家時代の森鷗外』岩波書店、2004に再録)。

- (3) 注(1) 拙稿参照。
- (4) 徳田武氏「『明清軍談』と『虞初新志』五人伝」(『国文学』学燈社、2005・6) に指摘がある。
- (5) 永井啓夫氏『新版 三遊亭円朝』(青蛙房、1998)。
- (6) 注(1) 拙稿参照。

いけざわ いちろう／ロンドン大学客員・明治大学教授